
センターだよ!

平成25年2月20日

NO.46

東濃西部少年センター

TEL 23-3455 FAX 26-8813

光りに 春動く 2月です



春を告げる万作の開花」
まなびパーク前庭にて

立春を過ぎても「春は名のみ、風の寒さや」と早春賦が、つい口について出てきます。確かにここ数日のきびしい冷え込みは、まさに冬の真ただ中。でも、日脚は毎日2分ずつのびています。

「日脚伸び」という冬の季語には、少しだけ春を待つ浮き立つ心が込められているような。皆さんはこの寒さ、どのように感じていますか。

「声かけ」活動 この1年を振り返る

平成18年 東濃西部少年センターが現在の多治見・瑞浪・土岐の3指導部体制になって、今年で7年が過ぎました。この間、青少年の健全育成と非行の防止に、平成22年からは子どもと若者の育成支援に、延18,200人からの少年指導員の皆さんに、献身的な尽力を賜ってきました。

この数は、経験者の層の厚さと、子どもや若者に関心を寄せる地域社会のすそ野の広がりを表すものでもあります。今回は、子どもや若者への「声かけ」活動を通して得られた、指導員の貴重な体験を紹介させていただきます。

若者たちと関わるなかで

指導員 今村 嘉津子

東濃西部少年センターでは、新任指導員113名をお迎えし、総勢200名で24年度の活動がスタートいたしました。2年目の私は、新任研修での声の掛け方、相手の目線に合せて話しかけたり聞いたり、事細かな御指導を受け、温かな目線で青少年への挨拶を心がけてきました。

黄色のベストを着ている時は、大きな声で返事が返ってきますが、ベストを着ていない時は、声かけをしても言葉が返ってきません。まだまだ自分自身の力不足を感じている次第です。

夏休みの終わりのころ、土岐のセラトピアで「3地区合同研修会」が開催されました。中京高等学校の林勇人校長先生から、伝統ある学校の沿革や校則等々を紹介していただきました。その中で、教師と生徒が友達感覚の会話をしていると聞き大変驚きました。

また、スポーツでは全国大会に数々出場され、大変良い成績が出ているそうです。有名校で有るが故、全国から集まる生徒は、寄宿舍生活をしていると説明されました。

研修会の後半、いくつかの班に分かれた分散会で、自宅通学されている2名、寄宿舍通学3名の生徒さんと意見交換をしました。その中で高校生全員から、両親には感謝の気持ちでいっぱいという言葉が返ってきました。16～17才の言葉とは信じられなく、自分の耳を疑いました。自立した健全な高校生活を送って居られる生徒さんに、エールを送りたいと思います。

参加した高校生の感想は、3ページをご覧ください

冷たい雨が降りしきる11月、多治見駅で古川市長をはじめ多くの来賓に御参加頂き「全国子ども・若者育成支援強調月間」にともなう、啓発活動に取り組みました。冷えた指先で演奏して頂きました多治見北高等学校吹奏楽部の皆さん、美しい音色の演奏にとっても感動しました。その後、多治見北高等学校の生徒さん達と一緒に、チラシを配布しながら、育成支援を訴えました。

「声かけ」で大切にしている私の心構え

心のこもっていない挨拶は無駄である。

心の中は誰にも見えないけれど、心遣いは誰にも見える。

素直な少年たちを、これからも温かい目で見守りたいと思います。

3 地区合同研修会 分散会・異年齢交流から

参加した高校生は

中京高校 2年 久富 健太

8月26日、セラトピア土岐で異年齢交流が行われました。僕の親くらいの世代の人から、おじいちゃんくらいの世代の人まで、幅広い年齢の人々が集まっていました。中京高校からは、僕達弓道部剣道部の部員が参加しました。

最初に校長先生の話聞いてから、それぞれのテーブルに分かれて話し合いに移りました。

僕達のグループでは、家族について話し合うことになり、僕は寮生活をしているので、その中で感じたことや両親をはじめとする家族の大切さについて話しました。

他にも高校生から見た大人の事や、大人から見た高校生の事。そして、親の目線から見た子どもなど、普段ではなかなか聞けない話を聞いたり、逆に話したりと勉強になったと思います。

また、高校生の自分なりに、家族の事を考える良い機会になったと思います。純粹に親孝行したいなと思ったし、やっぱり家族っていいなと思いました。

この思いを大切にしていきたいです。



中京高校 2年 西 すみれ

私は、3地区合同研修会に参加して、地域の方と「家族との関わり」についてお話しさせていただきました。特に祖父母と孫の関わりが少ないということでした。祖父母と孫では年が離れすぎていて、共通の話題が少ないのです。離れて暮らしている家庭もあります。

私も親とはよく話しますが、祖母とはあまり話しません。どんな話をしているかわからないからです。でもこの研修会で、そう思っているのは、私だけでなく祖母もだということを知ることができました。なので、これからは自分から祖母に話しかけて家族のつながりを大切にしていきたいです。

研修会は、地域と私がつながるだけでなく、私と家族もつなげてくれました。参加して本当に良かったと思います。

青少年を守るためのネットワークづくり

「さようなら。」と声をかけると、「さようなら。」と声が返ってくる。「気を付けてね。」と声をかけると、「はい。」「わかりました。」「ありがとう。」と言葉が返ってくる。これらの言葉が返ってくる時、指導員としてのやりがいを感じます。反面、そうでない児童や生徒を見かけると、このままでいいのかと心配になることがあります。私たち指導員にとって、児童や生徒の安心や安全、人の笑顔を求めているのだと思います。

わたしが、一昨年、指導員になった時には、補導することを指導員の役目だと感じ、取り組み始めたように思います。現在の思いとはかなり違っています。今は、児童や生徒、さらには地区のためにどのように役に立てることができるのだろうと思うようになったことです。もっと言えば、明るい町作りのためにできること、その一翼を担っているのが、わたしたちの役目だと思うようになりました。そのためには、動きをつくることとともに、ネットワークを大事にすることだと思っています。

わたしは、養正小学校生徒指導主事・少年指導員として2年目を終えようとしています。また、養正地区の班長としても2年目を終えようとしています。この2年間で振り返ってみると、ネットワークの大事さを感じます。

一つ目は、指導員同士のネットワークです。地域でのこと、学校のこと、雑談を含め、様々なことを話します。そうやって話すこと・聞くことから、多くのことを共通理解することができます。それらの話から、どのように活動していくのかが決まっていきます。

二つ目は、地域のネットワークを増やしていくことです。公民館・児童館・お店・コンビニエンスストア・交番・図書館（情報センター）など、ことあるごとにめぐり、話しをします。そうすることで、情報を交換することや、何かの出来事の際に情報を伝えて下さるネットワークづくりにつながっています。これらのネットワーク作りのおかげで、何度も児童を適切な方向に導くことができました。

三つ目は、いろいろな場を通じて情報を交換することです。生徒指導主事をして感じることは、様々な場での交流があることです。小学校の先生同士の情報交流。小学校と中学校間の交流。中学校と高等学校の交流。幼稚園・保育園と小学校の交流などです。また、各地区の長が集まる班長会での交流です。そういった交流から、今、必要になっていること、学校でできること、さらには地区として大事にしたいことが見えてきます。

地道な活動ですが、ネットワークを作っていくことこそが、児童や生徒、地域のためになると思っています。ネットワークを大事にして取り組んでいきたいものです。

この2年間近く、少年指導員の活動をしていてうれしいことは、年々、あいさつをする児童や生徒が増えてきていることです。声をかけると応えてくれる人が増えてきました。学校独自の活動も盛んに行われています。また、地区をあげての取り組みの成果だと思えます。そういった活動とともに、わたしたちが取り組んでいる活動の成果の表れだと思っています。また、蛍光色のベストによる認知度も高くなってきました。わたくしたち指導員の活動の成果の表れだと思えます。

最近気になっていることは、交通事故の多さです。登下校中に起こる交通事故が多いと聞きます。そういった面にもわたくしたちの働きかけが有効だと思えます。これからを背負っていく人たちのために、ネットワークを生かし、声をいっぱいかけ、明るい町づくりを目指していきましょう。

1班 養正小学校区 班長 安藤 暢浩

少年センターで学んだこと

元指導員 出口 満知子

月に一度の街頭指導、様々な子どもとのふれあいを求めて町を歩く。すっかり静かになった駅前。

毎年4月の駅前は入学したばかりの高校生で賑わいます。中学生時代の友達に会うため、また新たな出会いを求めて駅の階段に座り込む。お菓子を食べ散らかしたり、喫煙をしたり、このように目立つところで違法行為を行うのは、無視をして通る大人への挑戦でしょうか、それとも大人からの声かけを待っているのかも知れません。

声をかけると待っていたかのようにしゃべってくる子、ふざけた返事をする子、反応はさまざまですが、生意気なことを言う少年から滲み出る幼さに愛しくさえ感じます。

少年非行の始まりはタバコです。未成年者の喫煙を防止するには小学校低学年までに、成長期の体に喫煙がいかに害を及ぼすかを刷り込むことが必要です。これらのことは家庭で指導すべきことですが、家庭や地域の教育力が低下している現代においては、学校教育の現場でこれらを強化する必要があるのではないのでしょうか。

地域力の低下は私たち一人ひとりに責任があります。おせっかいと言われるのを恐れて他人の子どもを見て見ぬふりをしているうちに、子どもたちの心はどんどん地域の大人から遠ざかってしまいました。

私たちが今おこなっている少年たちへの声かけは、成果の見えるものではないけれど、地域の大人が君たちのことを見守っているよというメッセージです。このように働きかけることによって大人社会と子ども社会の壁が低くなり、いつかなくなっていくかも知れません。

土岐保護司会では3年前高校生に呼びかけ BBS ジュニアというボランティア組織をたちあげました。ボランティア活動を通して多くの人々とふれあい成長してもらいたい、そんな思いで見守りながら彼らと共に活動しています。人は人との関わりのなかで、多くを学び育っていきます。人との関わりは人生における財産です。彼らもこの活動を通してたくさんの財を得ることを願っています。

このような組織を立ち上げることができたのも、かつて少年センターの指導員として10年間、指導員の方々また関わった少年たちから学んだことがちからになったと感謝しています。

「こんにちは」と声をかけられて

センター指導主任 坂井 正昭

ある秋の日の午後でした。抜けるような青空と心地よい風に誘われて、私は自転車で家を出て、団地の中の上り坂を一心にペダルをこいでいました。道の反対側の向こうから、ランドセルを背負った女の子が下りてくるなど思った時、その子が「こんにちは！」と声をかけてくれました。私も「こんにちは」と応えると、直ぐに「気を付けてくださいねー。」と返ってきました。その道は団地内の幹線で自動車も時々通るため、車道を走っていた私を見て声をかけてくれたのです。咄嗟のことでしたので、「ありがとー！君もなー。」と振り向いて通り過ぎました。

それだけのことでした。しかしその後、ペダルをこぐ足がとても軽くなりました。いつもとは立場が逆でした。私から声をかけるべきところで、子どもの方から声をかけてくれたのです。すれ違いざまに、相手の身になって危険を察知し、声をかけてくれた。今の世ではめずらしいことです。しかしそれこそが、センターが目指している人間関係づくりにつながるのです。上から目線でなく、子どもたちと同じ目線で、同じ立ち位置で声をかける、あいさつする。それがセンターの街頭指導の基本です。

それをランドセルの女の子が、あらためて気づかせてくれたのです。大人の私たちが一生懸命やろうとしていることを、その女の子はいとも簡単に、通りすがりの知らない大人に、ごく普通に声をかけてくれたのです。思わず、「ああ、この子のように大人も子どもも、みんな声をかけ合うことができたら、気持ち良く、楽しく過ごせるなあ」と思ったのでした。今思い出しても、頬が緩んでしまうような、経験でした。

たとえば駅前で、座ってタム口している若者がいた時に、「他の人の通行の迷惑になるから、早く帰りなさい。」と言って、素直に聞いてくれる子は良いのですが、そうでない時にどうするか・・・です。

彼らがどんな問題を抱えているか分かりません。大人に対する不信感の大きさも分かりません。そんな時は、腰を下ろし彼らと同じ目線になって、「どこから来たの？」「誰かを待っているの？」などと普通の会話から始めることが大切です。決して、こちらの言うことを聞かせようとしないことです。まず、彼らの話を聞くことが先決です。相手の立場に寄り添わなければ人間関係は成立しません。

話を始めることで、まずはスタート地点に立つことが出来ます。何回か会話をする中で、新しい展開が開けてくるかも知れません。それを期待したいと思います。

ランドセルの女の子が、そんな事をもう一度、考えさせてくれました。

